



2023 年 12 月発行

No. 14

日本 DMORT ニュース第 14 号

DMORT の公式ニュースレター

目次

1. はじめに; 吉永理事長
2. 韓国より訪問団 懇談会
3. 第 1 回 アドバンスド・コース研修
4. 静岡県総合防災訓練
5. 中部国際空港消火救難救急医療活動総合訓練
6. 徳島「警察・医師会・歯科医師会」合同災害時遺体対応訓練
7. 滋賀県合同防災訓練
8. 事務局からのお知らせ

1. はじめに

理事長 吉永和正

日本 DMORT 会員の皆様。

昨年(2022 年)の前半まではコロナの影響で日本 DMORT の重要な活動である研修会開催、大規模災害訓練への参加ができない状況でした。昨年 10 月の中部国際空港訓練は中止となりましたが、京都や滋賀での訓練が開催されるようになり、11 月にはやっと「第 25 回 DMORT 養成研修会 IN 愛知」が開催できました。今年(2023 年)になってからは各地での災害訓練も実施されるようになり、10 月 12 日には 2 カ所で同時に訓練が開催されました。中部国際空港消火救難・救急医療活動総合訓練と徳島県「警察・医師会・歯科医師会」合同災害時遺体対応訓練です。(詳細は本文をご覧ください) 同時に大規模災害訓練が開催されるとスタッフの配置が大変ですが、熱心な登録会員の参加もあり、それぞれを有意義な訓練とすることができました。

このような状況の中でコロナからの復活を実感しています。そして、もう一つうれしいお知らせです。11 月 27 日に滋賀県警察と協定締結がなされました。詳細は次号でお知らせしますが、これで 8 府県警との協定締結、協定はないが活動実績のある 3 府県警と併せて 11 府県警で活動が可能となってきています。

DMORT 活動も着実な広がりを見せています。今後とも、会員の皆様の積極的な参加、ご支援をお願いいたします。

2. 韓国より訪問団 懇談会

理事長 吉永和正

令和5年8月1日(火)10:00~12:50、龍谷大学梅田キャンパス研修室において、韓国政府の訪問団5名を日本DMORTとして受け入れました。吉永、村上、黒川、山崎の4理事が対応しました。令和5年6月20日に日本DMORTが公表しているアドレス(information@dmort.jp)へ韓国行政安全部社会災難対応政策課事務官の金成鎮(キムソンジン)さんからメール連絡が入りました。「行政安全部は安全及び災難に関する政策の立案や総括や調整を担当する韓国の中央省庁で、自然災難や社会災難の対応を担っています。梨泰院雑踏事故の後、安全システムを立直すために多様な政策に取り組んでいますが、そのなかで遺族への対応や支援に関して不十分な点があることに気づきました。そこで当法人(日本DMORT)を訪問して遺族支援(特に精神的支援)や専門家育成、研修事業などに対するノウハウや実績を学びたいと思っております。」と訪問の目的が述べられており8月1日10:00~12:00を希望すると日時指定もありました。とりあえず私は日程調整可能であったので受け入れる旨の返信を出しました。この時点では9名の訪問者がリストアップされていましたが、7月24日に、韓国で発生した豪雨・土石流災害の調査のため訪問メンバー変更するという連絡が入り、訪問者は5名の政府関係者と通訳1名になりました。この訪問を理事会に諮ったところ、村上副理事長、黒川理事、山崎理事が参加可能ということで準備を進めることになりました。会場はアクセスのよい龍谷大学梅田キャンパスを黒川理事が確保して場所も決まりました。7月2日に事前の質問書が送られてきていたので、その回答を準備しました。8月1日10:00に訪問団を受け入れてあいさつをしました。7月26日から日本に来ており、今回は隅



写真1 吉永先生の講義

田川花火の雑踏警備の調査が目的で、その間に DMAT、DPAT などの事務所を訪ねています。DMORT との面談の後、関空から帰国する予定とのことでした。訪問メンバーは行政安全部 社会
災難対応政策課 課長、社会災難対応政策課 事務官、災難安全点検課 事務官、収拾支援課
事務官、警察庁対テロ危機管理課 人波管理 TEAM 研究士の 5 名と通訳 1 名でした。
まず、吉永が DMORT の概要について 10 分程度のスライドで説明しました。(通訳を入れると 20
分程度) その後、事前に質問のあった項目について順次説明しました。

質問の項目

- ・会員の構成比 ・調整員(ロジ)の役割 ・派遣チーム立ち上げ派遣の手順
- ・予算 ・公的支援はあるか ・平時の DMORT 業務(研修など)
- ・長期支援での役割 ・消防、警察などとの連携

DMORT の資料を用いて説明しました。一連の説明の中で理解に苦しむと発言のあった項目が
2 点ありました。第一は、正会員の年会費が登録会員より高いがその見返りがなく、むしろ役割と
しての負担が大きくなる点です。第二は、ほとんどの参加メンバーが公休ではなく、有休で活動し
ている点です。私自身は、これまで特別な違和感を覚えていませんでしたが、皆さんはどう思われ
るでしょうか。

2018 年にも韓国からの訪問を受けていることを伝えたところ、韓国で DMORT に関する報告書
を見たことがあるとのことだったので、恐らくその時のものと思われます。この後、村上副理事長
から長期支援組織について、黒川理事から京都府警での訓練、山崎理事から大島・熱海での経
験の説明がありました。

当初の予定は 10:00～12:00 でしたが、実際の面談時間はこれを 1 時間近く延長することとなりま
した。DMORT への高い関心の表われであろうと思っています。

韓国の遺族対応はこれまで行政から行われる手続きや行政支援の説明にとどまっていたが、
今回の訪問から、遺族の心的支援が必要であることは強く感じておりその組織を模索している
ということはしっかりと感じ取ることができました。韓国にどのような形で DMORT が根付くかはまだ
分かりませんが、できる支援は今後も続けたいと思っています。

副理事長 村上典子

私からは、長期遺族支援組織との連携について、DMORT 養成研修会でも話している内容を話
しました。韓国訪問団の方は、今回 DPAT(災害派遣精神医療チーム)を訪問する時間がなかつ
たようで、DPAT についてもいろいろ聞かれました。彼らは、行政による公的な活動を目指してい
るようでしたので、われわれ民間組織よりもむしろ DPAT の方がイメージに近かったのかもしれま
せん。個人的には「韓国のからし文化と日本のわさび文化の違いとグリーフの表現」「辛い！」と
口をあけるのと、「ツーン」ときて口を閉じるように、グリーフに関しても韓国人は大声で泣いたり発
散するけど、日本人は黙って耐える)の話が非常に興味深く感じました。

理事 黒川雅代子（京都府支部長）

黒川からは、京都府警察との合同訓練の様子を写真とともに紹介しました。大規模災害が起こった際、警察との連携は欠かせず、合同訓練は重要であることをお伝えしました。現場で活動するためには、DMORT 隊員も日頃から訓練に参加し、スキルを高めておくことはもちろんのこと、警察官と DMORT がどのように連携することが家族の支援につながるのか、訓練によって、お互いの役割分担を、現場レベルでつかんでおくことが重要であることをお話ししました。京都府警察とは、協定書の中にも合同訓練が明文化されており、毎年合同訓練を行っていることを報告しました。特にその件についての大きな質問はなかったと記憶しています。

理事 山崎達枝

山崎からは、東京都大島町で発生した台風 26 号と熱海市で発生した熱海市伊豆山土石流災害での支援活動経験についてお話をいたしました。災害で亡くなる方の遺体はあまりにも惨すぎる。家族は最後の別れになるがその時に会わせたいほうが良いのか否か悩んだこと。また、行方不明中の家族への対応の体験談を伝えました。設立に対する質問が多く、望む気持ちが伝わってきました。設立されることを祈っております。

思わず笑いながら頷いたことがありました。それは韓国と日本の文化の違いです。その内容は副理事長でも報告され重なりますが、痛い時や悲しい時の表現方法を、赤トウガラシ（韓国）は、顔を赤くして上向きで口を開けて「辛い」と感情を爆発させて叫ぶ。一方わさび（日本）は顔を青白く涙を流しながら下向きで口を閉じて鼻をすすりながら感情を出さずにじっと耐える。表現豊に動作も加えて説明されました。あまりにも的確であったことから笑いを誘い、時間は延長されましたが終始和やかな雰囲気です異文化理解の時間で終わりました。

3. 第 1 回 アドバンスト・コース研修

「日本 DMORT アドバンスト・コース（試行版）の開催について」

副理事長 村上典子

DMORT 養成研修会は 2010 年 5 月に当時の世話人（現在の正会員）による試行版を経て、同年 9 月に第 1 回を開催。以後、2023 年 7 月までに 26 回開催され（新潟大学医学部災害医療教育センターとの共催の 2 回をあわせると計 28 回）、現在までに約 880 名が受講しているわけですが、1 回だけの受講に限定しているため、古い方は 10 年以上前の受講となります。また DMORT としての災害実働経験を経て、もっと実践に即した内容のアドバンスト・コースの必要性が理事・正会員の間でも課題となっておりました。このたびようやく、河野智子理事が中心となって準備くだ

さり、京都第一赤十字病院を会場にまず試行版として、10月21日(土)に開催する運びになりました。参加者は正会員(理事含む)22名です。

内容は、午前中は座学で京都府警犯罪被害者支援室の方による「警察の活動」に始まり、「発災から派遣までの流れ」「到着から活動開始」「遺体検案の実際」「活動の実際(熊本地震、熱海水害、北新地ビル火災、ロジ)」「撤退から活動終了まで」。そして「遺族・行方不明者家族と接する際の様々な心得、診療記録について」、約2時間にわたり行いました。午後からはグループワークで、テーマとして「現場の警察官への説明と信頼を得るための行動」「損傷の激しい遺体との対面について」「どこまで医療行為を実施するのか」「他団体との連携について」、たっぷり1時間かけて話し合いました。その後発表・ディスカッションも1時間かけて行った後、最後に「遺族の講演から学ぶ」と題して、阪神・淡路大震災で当時1歳半の息子さんを喪ったご遺族のお話を聞き、質疑応答の時間も設けました。ご遺族のお話は心に深く迫るものがあり、会場にはすすり泣きの声も聞かれました。私たちの活動が少しでもご遺族の助けになるならという、決意も新たになるものでした。

今後、どのような形で開催していけるかを検証した後、会員の皆様にも受講のご案内をすることになるかと思っておりますので、どうかよろしくお願いいたします。



写真2 アドバンスト・コース研修 風景

登録会員 大分県立看護科学大学 石田佳代子

過日、第1回 DMORT アドバンスト・コースに参加させていただきました。DMORT のメンバーは医師、看護師、心理士、救命士等の多職種で構成されており、当日の参加者も多職種のメンバー構成でした。様々な立場からの意見交換が行われたことで、保健・医療・福祉システムにおけるDMORT の位置づけや他チームとの役割分担などについて深く学ぶことができ、当該研修での報告やグループワークを通して、DMORT についての理解を深め広げることができました。

また、震災で大切な家族を失ったご遺族の講演では、当時の状況から現在までの想いを当事者の方の言葉で知ることができました。時が経ち状況が変化していく中で、大切な家族を失った悲しみと向き合い、受け止めようとされている当事者の方の様々な想い、自分が生きていることの自責の念や強い罪悪感、孤独感、支援者への感謝の気持ち、亡くなった家族のためにも笑顔で生き

ると決めた思いなどに触れ、ご遺族を支援するということの難しさを改めて自覚するとともに、支援に携わることへの自身の志を再確認できました。

私は大学の看護教員として、微力ではありますが、災害看護に関する研究活動を行っています。JR 福知山線列車脱線事故の際のご遺族の想いを出発点として、DMORT 研究会が発足したことを知り、DMORT の活動も参考にさせていただきながら、自身の研究活動を進めてきました。災害看護に関する研究者の一人として、災害死亡者の尊厳を守りながら適切にご遺体を取り扱うことやご遺族へのケアに、看護師として最後まで手を尽くせることが望ましいと考えています。しかし、その一方で、トリアージに携わる支援者は、救命活動と遺体対応業務とが並行した過酷な業務状況にあり、救命できなかったことへの無力感、黒タグを付すことに伴う苦悩、遺体との直面による衝撃などによる心理的負担を伴い易く、心身への影響は大きいと推察されます。事前の準備もなく災害時の大混乱の中での円滑な対応は大変難しいと考えられますので、支援者が受けるストレスの軽減に役立つ教材の製作などにも取り組んでいます。拙い私ですが、DMORT の正会員として少しでも貢献できるように尽力したいと思います。

4. 静岡県総合防災訓練

「静岡県総合防災訓練報告」

正会員 総合病院聖隷浜松病院 別所輝哉

令和 5 年 9 月 3 日 8 時 30 分より、静岡県総合防災訓練の一環として遺体安置所設置・運営の訓練が行われました。今回は、静岡県下 DMAT の知人から遺体安置所設置担当の浜松市役所の担当を紹介いただき、参加させていただく運びとなりました。県の総合防災訓練としては、遺体安置所の設置が初めての試みということで、安置所設営からご遺体受付と引き渡しまでの流れや動線・配置の確認を計画とされました。訓練参加者は、浜松市市役所職員、静



写真 3 静岡県総合防災訓練の様子

岡県警、JA の葬祭担当者、浜松市医師会・歯科医師会が参加し、他にも隣市の市担当者など見学者も加わり約 80 名が参加しました。ご遺体の受付から、洗浄→検案→歯牙鑑定→整復→納棺→引き渡しまでの一連の流れを浜松市役所と静岡県警刑事課主導のもと、浜松市医師会・歯科

医師会・JA の葬祭担当者と共にひとつひとつ確認していきました。特に静岡県警刑事課からは、東日本の震災や熱海の土石流災害の事例や経験をもとに、各持ち場それぞれで配慮を要することや、所持品や必要書類の手続きの説明があり、実際ご遺体を扱う上での実際の重さや遺体の損傷についても説明が行われました。今回の訓練では、家族受付や控室の準備はされたが、実際の家族対応・ケアまではなく、あくまで手順を確認するに留まりました。担当者からは、今回家族支援までは手が届かなかったが、どう対応するのかわからず不安との訴えもあったため、DMORT として家族の反応も含めて家族役も家族対応も訓練ではモデルを示せるのではないかと考えに至りました。また、統括管理者も、遺体の洗浄作業や家族対応には、普段事務仕事をしている職員の精神的負担の不安がある旨の話もあり、支援者支援の必要性も改めて感じました。

訓練中若手の県警職員に自己紹介をした際、DMORT を認識していた方が何人かおられ、現場サイドにも徐々に認知がされていることを実感しました。訓練全体的を振り返るとまだ手探り感が否めず、来年以降も家族対応まで手が届くかどうかと言った印象ではありました。しかし、参加された市職員や県警はじめ、関係者の関係性は良く、来年の訓練にも DMORT の参加に前向きであったため、次回の訓練に向けた関係性の維持と今後への提案が必要と感じられました。

今回直接私たちへの取材はありませんでしたが、9 月 4 日の静岡新聞内の訓練の記事で DMORT の掲載がありました。

5. 中部国際空港消防救難救急医療活動総合訓練

「中部国際空港消防救難救急医療活動総合訓練に参加して」

登録会員 特定医療法人共和会共和病院 鈴木誉也

平成 31 年 2 月の DMORT 養成研修会 IN 名古屋 を経て、初めての訓練に参加しました。コロナ禍もあってようやくこの機会が巡ってきたことにとても楽しみを感じていました。訓練見学の予定でしたが愛知県支部長の北川先生から家族対応訓練に参加する提案があり、初めての家族対応訓練となりました。研修会の際のロールプレイを経験した以降、初めての家族対応訓練には緊張が走りましたが、この貴重な体験を得られたことに感謝しています。

私が訓練時に DMORT 隊員として意識したことは「ご家族に寄り添う」ことです。自己紹介から不安なご家族に安心感を与えるよう声の大きさやトーンに気を配りました。警察からの説明やご遺体との対面など、様々な場面でご家族に寄り添い、「そばにいますので何かあればおっしゃってください」と伝え、少しでも安心感を提供できるよう心がけました。また、対応には言語的コミュニケーションよりも非言語的なアプローチを重視しました。私は、普段看護師として働いています。看護技術に「タッチング」という方法があります。タッチングとは、「非言語的コミュニケーションの1つと

してさするなど肌と肌との触れ合いを通じた相互作用性のある行為であり、心の触れ合い、情緒的安定をもたらす。緊張や不安を伴う状況のときに有効なケアの手段」とされています。このタッチングを通してご家族に寄り添う事ができたらと思いましたが、今回の訓練ではご家族が女性、支援者である私は男性という状況でした。男性から女性へのタッチングを簡単に行うのは適切ではないと考え、ご家族に触れはしないがいつでも手を差し伸べられる、包み込める形を意識しました。

訓練後の振り返りで、ご家族役を演じてくれた看護学生に今回の対応を伺うと「安心感があった」とタッチングがなくても安心感を与えることができたことを学びました。ご家族により感じ方は様々であるからこそ初めの自己紹介はご家族に少しでも安心できる存在だと認識してもらえるような声かけが必要であり、自己紹介から DMORT 隊員としての支援は始まっていると感じました。学びが非常に多い訓練であり、今後もたくさんの訓練に参加し自分自身を磨いていきたいと思います。



写真 4 中部国際空港 消火救難・救急医療活動 総合訓練の様子

「中部国際空港消火救難救急医療活動総合訓練に参加して」

正会員 名古屋市立大学大学院看護学研究科 澤田美和（愛知県支部）

コロナ禍により中止になっていた中部国際空港消火救難・救急医療活動総合訓練が2023年10月12日(木)午後に3年ぶりに開催されました。参加機関は全63機関、訓練参加人数は約400名の大規模な訓練で、DMORTからは県内登録会員3名・県外見学者3名・愛知県支部6名で参加しました。今回のDMORT活動訓練も、検視・検案活動訓練と隣り合わせで空港消防所の格納庫内で行われました。

愛知県警察本部犯罪被害者支援室の職員やANA・JAL職員も参加され、一緒にブリーフィング・デブリーフィングを行いました。ブリーフィングでは、まず各役割と対応の流れを確認しました。家族受付は空港職員と警察職員が連携して実施し、空港職員が搭乗者名簿との照合作業、警察は家族を待合室へ案内し、DMORTは警察により紹介・承諾を得た家族に対して関わることとしました。DMORT内でも、リーダー(1名)・サブリーダー(1名)・プレイヤー3ペア(6名)・学生対応(1名)と、役割分担を行いました。また、フロア配置図と遺体動線と家族動線をホワイトボードに示し、皆

で共通認識を図ったうえで、警察職員と説明場所・面会場所の確認と机・椅子の向きを検討しました。

訓練が開始されると、ブリーフィングで話し合った通りに対応は進みましたが、新たな課題が見いだされました。1 点目は、訓練の設定上、今回は 3 体のご遺体の対応であったが、実際の航空機事故ではさらに多くが想定され、遺体安置場所を別で設置する必要があると考えます。2 点目は、家族受付で搭乗者名簿との照合作業を行うため、家族受付・待機室にいる家族は必ずしも黒タグ被害者の家族のみではないということです。つまり、発災直後は各被害者の状況が不明で混沌としているが、徐々に被害者の安否確認が進むようになると、安堵する家族と悲嘆する家族が混在すると想定されます。このため、黒タグの家族は他の家族とは別の場所に対応する必要があり、今回の訓練の配置からさらなる検討の余地があることが明らかになりました。3 点目は、空港職員が被害者家族に対して事故の補償手続きの説明をするタイミングと、その仲介をどのように行うかという点です。これは、事故の特性上、空港職員に対する攻撃性が生じることが想定され、支援者支援についても今後の課題となりました。本訓練には長年に渡り参加させて頂いておりますが、まだまだ毎回新たな課題が見いだせ、よりきめ細かい対応ができるよう努めたいと思います。

6. 徳島「警察・医師会・歯科医師会」合同災害時遺体対応訓練

正会員 徳島大学大学院 法医学分野 主田英之

令和 5 年 10 月 12 日に徳島県警察学校体育館にて、徳島「警察・医師会・歯科医師会」合同災害時遺体対応訓練が、実施されました。

今回は、本年 3 月に協定締結となりましたことを受けて、日本 DMORT が初めて参加いたしました。日本 DMORT からは、吉永理事長、DMORT 役として、理事の河野さん、正会員の浅田さん、主田、それから見学の会員 6 名と計 10 名の参加となりました。訓練の様式は、災害発生想定の下、死体安置所に発見されたご遺体が搬送され、受付、検視、検案、家族受付という流れを、順番に実施し、参加者全員が、全体の流れを把握できるというものです。実際の訓練では、南海トラフ地震の発生後に津波の被害を受けたという想定で、2 つのシナリオに基づき、体育館に遺体が搬送されてくるところから始まりました。安置所の場面では、県警の被害者支援室員らが受付を担当され、家族役の警察官を案内、DMORT が付き添いました。初めて DMORT 参加の訓練ということで、手探りな部分はあったと思いますが、一つの形を作ることが出来たと思います。NHK や地元テレビ局、新聞社など報道の取材もありました。また、参加されていた県内の役所の方からも声をかけていただき、注目度は高かったように思います。

これからもこのように訓練に参加しながら、連携を深めて行ければと思います。

「徳島『警察・医師会・歯科医師会』合同災害時遺体対応訓練に参加して」

登録会員 一般社団法人エシカルプラス 野村 香

今年、DMORT に入会し初めての訓練参加となりました徳島では、南海トラフ巨大地震を想定した内容でした。

訓練では、ご遺体受付から安置までの流れを検視官から丁寧に分かり易く説明され、遺体安置所で自分が活動するとしたら「具体的にこう動こう」とイメージができる内容でした。遺体安置所のレイアウトや、各設置場所、入口の工夫やブルーシートのかけ方など、それぞれ配慮がされている様子も見学でき、災害が多い地元でも直ぐに役立つと思いました。

訓練に参加して感じたことは、家族対応や支援者の支援、各機関との調整と、その場の状況に合わせた動きができる柔軟性が必要ということです。また、私自身が活動をするとしたら、感情に揺さぶられず、起きている状況を俯瞰的に捉え、淡々と粛々と活動しようと強く思った徳島訓練でした。

7. 滋賀県合同防災訓練

「滋賀県合同防災訓練に参加して」

賛助会員 横浜市立大学 山田 典子

災害訓練当日、神戸赤十字病院心療内科医村上典子先生が率いる DMORT チームが会場に来られ、京都第一赤十字病院の河野智子師長の段取りで会場設営や必要物品の配置が速やかに行われました。

開会にあたり、この滋賀県総合防災訓練を 5 年以上牽引して来られた滋賀医科大学法医学教室の一杉教授より挨拶をいただき、全員で会場の設営を行いました。行政、警察、法医学教室、葬儀社、DMORT チームら、総勢 90 名近い参加者が誰に指示を受けるでもなく、速やかに動き、何もない体育館が 13 分後には機能的な遺体収容と検死、検案、検査、遺族対応、ご遺体の納棺施設へとシステマティックに変化しました。

事例① 60 代 男性

軽トラックが水没し、妻と実姉が安否確認の相談に来られ遺体を確認しました。妻は言葉を失い、動揺を隠せない様子。姉は「まさか違うやん！」と否定しつつ、泣き崩れました。DMORT メンバーは妻を気遣いながら警察や行政担当者とのやり取りを行いました。区役所職員の「葬儀はしますか？」に対し、「え!? 当然でしょう! なんてそんなことを今聞くの!」と、怒りをあらわにしました。警察からの遺品の受渡し、役所の死亡届など、立て続けの説明と確認書サインに混乱をきた

している状況が見受けられました。DMORT メンバーは、遺族にそっと寄り添い、遺族の後方にしやがみ背中にも手を添えサポートの意思を示していました。あまり多くは語らず、見守っていたのが印象的でした。

振り返りの話し合いで、遺族から、「大変でしたね…」「しんどいですね…」など、声掛けをもらえると良かった、といった発言が聞かれ、寄り添いの在り方に対する貴重な意見だと感じました。

事例② 10代 女性

地震のため家屋が崩壊し、災害後娘と連絡が取れなくなり、安否確認のため避難所を回ったが娘に会えず、両親が被災者家族相談窓口に行ってきました。両親は大阪から滋賀まで娘の安否を確認するために交通事情も混乱している中やっと滋賀までたどり着き、疲労している様子が伺えました。遺体を収容している地域の小学校体育館にて両親は娘を確認することになりました。父親は娘と対面したとき「ちがうわ～！ちがうやろ！ な、（妻に同意を求めるように、目配せをし）、こんなちゃうわ！」と、やや大きな声を発していました。母親は「う、、、」と言葉を濁し、うなだれていました。警察官は遺品をひとつひとつ袋から出し、「これは娘さんのもので間違いはないですか？」と職務を続ける。父親はだんだん苛立ちを募らせ、机を強くたたきました。傍にいたDMORT メンバーは、これ以上、両親を刺激しないよう身体接触を避け、父親の視界から外れるところで見守っていました。

ロールプレイ後の振り返りでは、それぞれの役割を演じた思いを吐露し、災害で大切な子どもを失った親の激しい感情、抑圧された感情、それらを受けとめ職務を全うしようとする警察官がいます。その陰で亡くなった方やその遺族は、人手が足りないと後回しにされやすい存在ではないかと漫然と想像していました。このたび訓練を見学することで、平時からの備えが如何に大切かを再確認することができました。また、遺族を支援することは、被災して亡くなった被害者の「いのちに向き合い」残された家族の「生きるを支える」ことに繋がるものであることを再確信しました。

最後になりますが、このたび見学の機会をいただきましたこと、心より感謝申し上げます。



写真 5 滋賀県合同防災訓練の被災者支援の様子

「滋賀県合同防災訓練に参加して」

正会員 鈴田歯科クリニック 鈴田明彦

令和5年10月15日開催。今回の訓練では受付から始まり最後は行政の戸籍担当者が死亡届け、火葬許可書届けまでの説明があり一連の流れがわかった点では良かったです。まず体育館にいと、阪神淡路大震災が思い出されます。私の家の近くに遺体安置所の体育館がありました。行方不明になっているご家族の方を探されていたことが思い出されます。多数並べられた遺体を見ているご家族、変わり果てたご家族を見つけられ泣いているご家族など様々でした。やはり病院で会われるのと違って、治療も受けられずに遺体安置所(安否確認所)に行って対面されることから、納得しがたい気持ちが湧き上がると思います。

今回、私は二例目を担当しました。

「設定は20歳の女性(大学生)、倒壊した家屋で圧死。家族は、受付けを済ませ、警察官の方の誘導により待合場所で待機。次に説明を受ける部屋に案内され、死体検死等報告書などで家族への死因・その他参考事項の説明を受ける。そして警察の方から家族支援DMORTの紹介。次に遺体安置所にて遺体引き渡し後、顔貌、身体特徴、所持品等の確認、(そばに家族支援DMORTが寄り添う)再度説明を受ける部屋へ戻り説明。」

警察の方も現状を伝えようと一生懸命されているのはわかるのですが、やはり一方通行だったようです。気持ちの整理がつかず、父親が「落ち着かせて下さい。」と言われたことが気になった点でした。また次に警察の方が「家族支援DMORTに相談して下さい。」と説明していました。父親が「今ですか？後で相談してもいいですか？」と言われたとき、いつ介入して終わりがいつなのか？と思いました。今まで訓練に参加した限りでは当日ご遺体を家族に引き渡す時だけだと思っていた。大阪が実家で滋賀には大学に通うため下宿をしている設定でした両親もすぐには来れないことを訴えられていました。死亡届の記入依頼、氏名の公表に関する同意確認、遺体確認簿、遺品確認簿の作成など事務手続きの説明。最後に市役所の戸籍係の担当者来られ、必要な書類(火葬許可書の届けなど)にサインを求められていました。さすがに自分でもあの場ではサインは出来ないと強く思っていました。終了後の振り返りでも家族役の方も市役所戸籍係の対応のことを言っておられました。家族さんに寄り添った対応、お声かけの難しさを改めて考えさせられました。家族さんにとって居るだけでも安心なのかもしれません。またいろんな場所で開催される訓練に参加して対応能力を高めていきたいです。

8 . 事務局からのお知らせ

- ◆ 当法人の会計年度は1～12月ですので、まだの方は会費納入を宜しくお願いします。ご自身が会費納入をしているか不明の方は事務局までお問い合わせください。

◆ 2023 年度会員情報

理事 8 人
正会員 29 人
登録会員 150 人
賛助会員 3 団体

◆ 理事名簿】

理 事 長 吉永和正(医療法人協和会副理事長)
副 理 事 長 村上典子(神戸赤十字病院心療内科部長)
理 事 北川喜己(名古屋掖済会病院副院長)・愛知県支部長
 久保山一敏(京都橘大学健康科学部教授)
 黒川雅代子(龍谷大学短期大学部教授)・京都府支部長
 河野智子(京都第一赤十字病院看護部)
 長崎 靖(兵庫県監察医務室)
 山崎達枝(四天王寺大学看護学部看護学科准教授)
監 事 鵜飼卓(兵庫県災害医療センター顧問)

【事務局所在地】

住所 : 〒662-0934 兵庫県西宮市西宮浜 4-15-1 協和マリナホスیتال内
電話 : 0798-32-1112(代) FAX : 0798-32-1222
E-mail: information@dmort.jp
日本 DMORT ホームページ <http://dmort.jp>

◆編集後記◆

年の瀬 12 月師走に入りました。年末となり皆様におかれましては忙月かと存じます。「光陰矢の如し」月日の過ぎ去りは本当に早く感じますね。夏の暑さが長引き、寒さは突然のようにやってきました、短い秋がさらに短くなってきてるように感じますのは私だけでしょうか？

その様な短い秋ですが、新型コロナウイルス感染症も 5 類に移行されたことから、これまでにないほど研修や訓練が予定されました。NL ですので皆様にはタイムリーにお知らせすべきなのですが、紙面の都合上もございまして、14 号(2023 年 12 月)は 10 月 15 日に行われました滋賀県合同防災訓練までとしました。

その後の防災訓練や養成研修参加の様子は、次号 15 号(2024 年 4 月)にご報告いたしますので、お待ちください。研修や訓練の回数も増してます、会員の皆様に多くの情報をお伝えしますので、引き続き会員として日本 DMORT を支えて頂けますようお願い申し上げます

皆様 良いお年をお迎えください。 (編集担当: 山崎・矢野)